

第6回宮城 MCLS 標準コース、第2回宮城 MCLS インストラクターコースに参加しました (2015/2/07-08)

テーマ：多数傷病者への対応標準化トレーニング、Mass Casualty Life Support、「スイッチを入れる」
場所：宮城県消防学校（宮城県仙台市）

2015年2月7日(土)、8日(日)宮城県仙台市の宮城県消防学校において第6回宮城 MCLS (Mass Casualty Life Support: 多数傷病者への医療対応) 標準コース、第2回宮城 MCLS インストラクターコースが開催され、佐々木宏之助教（災害医学研究部門 災害医療国際協力学分野）が参加しました。MCLS トレーニングコース（日本集団災害医学会開催）は、多数傷病者発生事案にファーストリスポンダーとして対応する消防・警察・医療従事者を対象に、多数傷病者発生時の対応・概念・言語を適切化・標準化（共通化）し出来るだけ多くの傷病者の救命率及び社会復帰率の向上を目指すトレーニングプログラムです。

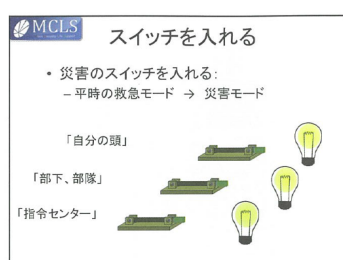
災害が発生した際、誰が災害傷病者対応へのスイッチの切り替えを行うのでしょうか？ある傷病者が倒れていたとします。通報を受け救急隊員が現場へ駆けつけると、さらに複数の傷病者が倒れています。指令センターには「人がたくさん倒れている」旨の通報が鳴り止みません。

ここでまず切り替えるべきは「自分の頭の中」にあります。「何かおかしい…。災害？」

平時の救急医療と災害時の医療とでは対応が明確に異なります。平時は「資源>>需要」ですので一人の患者（傷病者）を救うためにあらゆる医療資源を投入することができます。目の前で倒れている傷病者に全力を尽くせばよいのですが、しかし災害時には「資源<<需要」となり、限られた人員、医薬品・資器材を「救える可能性の高い」「より多くの傷病者」に振り向けなければなりません。その際には「個々の傷病者の対応は制限を受ける」可能性もありますが、躊躇してはより多数の犠牲者が発生してしまいます。そこで出てくるのが「トリアージ」の概念であり、更にその前に、自分の身の安全を第一に図る行動変容の必要性です。平成7年の地下鉄サリン事件の際には「地下鉄車内急病人多数」「爆発火災」「異臭」の断片的な情報のみで救急隊員・警察官が突入し、多数の二次負傷者が発生しました。

ここでまず大事なのが、災害モードの「スイッチを入れる」ことになります。自分の頭の中の「災害モードスイッチ」を「on」にし、今の状況が通常ではないことをいち早く認識し自分の行動を変容させます。次に「部下（同僚）」の災害スイッチを入れ、「指令センター（本部）」の災害スイッチを入れます。この「スイッチを入れる」という一見簡単そうな行為、実は MCLS でもイギリスの MIMMS® (Major Incident Medical Management and Support) という大事故災害での医療対応指針でも最も重要視されています。まず「スイッチを入れ」そこから MIMMS では「CSCATTT」、日本集団災害医学会では「ス指安情報要場所取り（すしあんじょうほうようばしょとり）」という一連の行動変容につながっていきます。

7日の標準コースには多くの救急隊員、消防士と医師・看護師、自衛官、海上保安官が参加しました。異なる職種の間が災害対応時の言語、対応を共通化すべくファーストリスポンダーとしての机上演習、また START 法（Simple Triage and Rapid Treatment 法）によるトリアージ訓練を受け、最後に筆記試験、実技試験を受けました。また佐々木助教は翌8日のインストラクターコースにも参加しました。今後、各地で開催される MCLS コースにモニター、インストラクターとして参加する予定です。災害対応時の迅速な第一歩を安全に踏み出すため、状況を冷静に判断しきちんと災害モードへの「スイッチを入れ」たいものです。



C: Command & Control	指揮と統制
S: Safety	安全
C: Communication	情報伝達
A: Assessment	評価
T: Triage	トリアージ
T: Treatment	治療
T: Transport	搬送

(英国MIMMS® Major Incident Medical Management and Supportより)

MCLS	先着隊の役割
(1)	スイッチを入れる：災害(多数傷病者)対応の可能性をまず一報
(2)	指揮：自分が指揮をとることを宣言、後着隊への下命
(3)	安全：安全確保
(4)	情報伝達：情報収集と通信手段の確保
(5)	報告：評価と報告
(6)	要請：応援要請
(7)	場所とり：駐車場、指揮所、救護所など

「すしあんじょう、ほうようばしょとり」。

文責：佐々木宏之（災害医学研究部門）